（様式１）　　2023（令和5）年度

自　己　評　価　表

（愛媛県立西条高等学校）
学校番号（　９　）

教育方針	人格の完成を目指し、国家及び社会の有為な形成者として、文化の創造と発展に寄与する人間を育成する。	重点目標	グローバルな視点を持ち、新たな価値を創造する人材の育成 ～それぞれの生徒に、適性に応じた志を持たせ、一人一人を伸ばす教育の推進～

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
進路実現	１　自分を信じて、粘り強く前に進む力を育成する	進路目標の実現に向けて努力を続ける生徒の育成 Ａ：100～80% Ｂ：79～60% Ｃ：59～50% Ｄ：49～40% Ｅ：39%以下	Ａ	生徒の自己評価で、81%の生徒が肯定的な評価となっている。	生徒や保護者に対して提供する進路情報の充実に努め、進路意識の充実を図る。新大学入試制度に対する情報を発信する。
		国公立大学、関関同立・ＭＡＲＣＨ等の有名私立大学合格者数130名以上 Ａ：130名以上 Ｂ：129～120名 Ｃ：119～110名 Ｄ：109～100名 Ｅ：99名以下	Ａ	国公立大学　104名 中央大学　１名 法政大学　１名 同志社大学　５名 立命館大学　12名 関西大学　８名 関西学院大学　９名 計140名	１年次から継続的な進路指導を行い、高い目標を設定させる。また、ＩＣＴを活用した授業の充実に努め、授業改善によって学力の向上に努める。
		旧帝大・早慶等の難関大学および医学部医学科合格者数10名以上 Ａ：10名以上 Ｂ：9～8名 Ｃ：7～ 6名 Ｄ：5～ 4名 Ｅ：3名以下	Ａ	京都大学　１名 北海道大学　１名 名古屋大学　１名 九州大学　１名 神戸大学　３名 愛媛大学（医学部）１名 徳島大学（薬学部）１名 山口東京理科大学（薬学部）１名 計10名	高い意識を持つ生徒に対して、個別指導を強化、充実して学習指導やマネジメントに努める。
		就職内定率100% Ａ：100% Ｂ：99～90% Ｃ：89～80% Ｄ：79～70% Ｅ：69%以下	Ａ	就職希望者11名全員が希望する就職先に就職できた。	生徒と企業の間にミスマッチが起こらないよう、今以上に様々な機会を捉え、生徒の就職活動を充実させていく。
資格取得		商業各種検定３種目合格者100% Ａ：100% Ｂ：99～90% Ｃ：89～80% Ｄ：79～70% Ｅ：69%以下	Ｂ	１年生で70%、２年生で88%、そして３年生で95%が目標を達成できた。 ３年生の72.5%、29名が３種目１級を取得者した。	家庭での学習時間を現状より、１時間以上確保することで、目標を達成できる。 部活動と勉強の両立を図る。
課題研究	２ 課題を発見し、科学的に考察する力を育成する	課題研究に主体的に取り組む生徒の育成 Ａ：100～80% Ｂ：79～60% Ｃ：59～50% Ｄ：49～40% Ｅ：39%以下	Ｂ	生徒の自己評価で、93%の生徒が肯定的な評価になっている。	課題研究の内容の更なる向上に向けた指導やアドバイスをすることにより、生徒の意欲を高める。
		課題研究を通じた生徒の研究スキル向上 Ａ：100～80% Ｂ：79～60% Ｃ：59～50% Ｄ：49～40% Ｅ：39%以下	Ｂ	学期ごとに活動のルーブリック評価を行っている。このうち、「科学的に探究する力」の達成度は３学年３観点の平均評価が７８％であった。	課題研究について、生徒の研究スキルが向上する指導方法の研究に努めるとともに、教員間で共有する体制を整える。
		課題研究　各種コンテスト応募数100以上 Ａ：100以上 Ｂ：99～90 Ｃ：89～80 Ｄ：79～70 Ｅ：69以下	Ａ	自然科学系　66本 社会科学系　139本 計　205本	ＳＳＨも2期に入り、コンテストへの応募の環境は十分整っているので、指標を変えた方がよい。力を入れるべきは作品の質の向上である。
		課題研究　各種コンテスト入賞数30以上 Ａ：30以上 Ｂ：29～20 Ｃ：19～10 Ｄ：9～5 Ｅ：5以下	Ｂ	自然科学系　22本 社会科学系　4本 計　26本 日本学生科学賞愛媛県議会長賞　ＳＳＨ研究発表会ポスター発表賞　生徒投票賞他	大学等と連携することで、教員の課題研究の指導スキルの向上に努めるとともに、生徒の課題研究の質の向上を図る。入賞も全国規模の大きい大会の入賞を目指す。

授業改善	２ 課題を発見し、科学的に考察する力を育成する	分かりやすくて力が付く授業の実践 Ａ：100～80% Ｂ：79～60% Ｃ：59～50% Ｄ：49～40% Ｅ：39%以下	Ａ	授業評価の生徒アンケートでは、授業が分りやすいと感じる生徒が83%、力がつく授業と感じている生徒が84%であり、昨年に引き続き高い評価を得た。	各教科の研究授業や授業相互参観週間などを通して授業改善に関する情報交換、情報共有を図る。他校の授業研修にも積極的に参加し、自己研鑽を積む。
		ICTを活用した授業の実践 Ａ：100～80% Ｂ：79～60% Ｃ：59～50% Ｄ：49～40% Ｅ：39%以下	Ａ	すべての教室にプロジェクターが配置されており、全教職員が適切に場面に応じてＩＣＴ機器を用いて授業を行うことができた。ＩＣＴを活用した授業研究も行われており、全教職員がＩＣＴの活用についてしっかりと研修を積んでいる。	さらにＩＣＴを活用しやすいように環境整備を進めていく。
読書		夢中になれる本との出会いを導く図書館教育 Ａ：100～80% Ｂ：79～60% Ｃ：59～50% Ｄ：49～40% Ｅ：39%以下	Ｂ	達成率は、１年生61.8%、２年生73.2%、３年生72.5%、学校全体69.1%であった。昨年度に比べ、１年生が10%程度下がっている。	読書に関するホームルーム活動を年１回以上実施するとともに、図書委員会の活動をさらに活性化し、各クラスへの読書啓発を行う。 「朝の読書」に対する教員の協力を求める。
表現力	３　他者と協働し、新しい価値を創る力を育成する	生徒のコミュニケーション能力やプレゼン力の向上 Ａ：100～80% Ｂ：79～60% Ｃ：59～50% Ｄ：49～40% Ｅ：39%以下	Ａ	学期ごとに活動のルーブリック評価を行っている。このうち、「他者と協働する力」の達成度は３学年２観点の平均評価が８５%であった。	課題研究発表会やＳＳＨ事業を通じてプレゼン力や質疑応答力の向上を図る教育活動を展開する。
		課題研究発表および体験発表者数100名以上 Ａ：100名以上 Ｂ：99～90名 Ｃ：89～80名 Ｄ：79～70名 Ｅ：69名以下	Ａ	コロナ対策が５類に移行し、ステージの発表や対外での活動が大幅に増えた。延べとして一部に偏ることなく多くの生徒に発表機会を与えることができた。	大会やコンクールを精選し、効率よく効果的な活動を目指していきたい。
創造力		生徒によるイベント企画件数10件以上 Ａ：10件以上 Ｂ：9～8件 Ｃ：7～6件 Ｄ：5～4件 Ｅ：3件以下	Ｂ	生徒会活動や課題研究の中での立案・計画から、実行に至るものが見られるようになり、西条高校生の活躍がメディアに取り上げられるなど充実してきている。	同じ西条高校生の活躍に刺激されながら、現在進行中の企画の充実や、新しいアイデアの登場など、今後に期待したい。
地域貢献		地域に貢献する活動に積極的に取り組む生徒の育成 Ａ：100～80% Ｂ：79～60% Ｃ：59～50% Ｄ：49～40% Ｅ：39%以下	Ｂ	課題研究の中で市役所等との連携があり、地域に対する関心は高い。地域のボランティア活動等にも熱心な生徒は多い。	近年いい傾向が続いているので、積極的に取り組む生徒100%達成を目指したい。
		地域と連携したボランティア活動参加者数200名以上 Ａ：200名以上 Ｂ：199～140名 Ｃ：139～120名 Ｄ：119～100名 Ｅ：99名以下	Ｂ	今年度は、ボランティアの案内や募集も増え、１月末現在170名の参加を数えており、昨年よりも参加者数は増えた。	もっと参加者が増えるようボランティア活動の大切さを伝えていきたい。
部活動		県総体出場者数200名以上 Ａ：200名以上 Ｂ：199～140名 Ｃ：139～120名 Ｄ：119～100名 Ｅ：99名以下	Ｂ	インターハイにつながった部もあったが、また県総体出場者数が200名を割ってしまった。	県新人大会及び県選抜大会で県大会に出場した部も増えており、来年度の活躍を期待したい。
		県高文祭出場者数100名以上 Ａ：100名以上 Ｂ：99～40名 Ｃ：39～20名 Ｄ：19～10名 Ｅ：9名以下	Ａ	昨年に続き、高文祭出場者数は100名を超え、全国高文祭につながった部もいくつかあった。	引き続き充実した部活動を心掛けたい。
情報発信	４　学校の情報を積極的に発信する	学校の魅力を積極的に伝えるホームページの作成	Ａ	更新回数422回。前年度からの200%増。教職員全体で分かりやすい情報発信に努めた。加えて、公式YouTubeと公式インスタグラムも開設し、さらなる発信方法を開拓した。	公式インスタグラムでの発信に手応えを感じているところであるので、さらに研究し発信する。
業務改善	５　職場環境の整備を行い、適切な勤務時間とする	仕事にやりがいを感じるとともに、「ノー残業デー」を意識してワークライフバランスを目指す。	Ｂ	職員室の片付けを行い、明るい職員室を維持できるようにした。タイムマネジメントの意識を持ち、仕事の効率化を促した。	「ノー残業デー」を第４月曜に固定し定着を図る。 採点ソフトを導入して仕事の効率化を目指す。

※ 評価は５段階（Ａ：十分な成果があった　Ｂ：かなりの成果があった　Ｃ：一応の成果があった　Ｄ：あまり成果がなかった　Ｅ：成果がなかった）とする。